

日本きのこ図版掲載の「シマショウロ」とイグチ科地下生菌 *Turmalinea mesomorpha* Orihara との関係および和名使用について

折原貴道* (神奈川県博)・中島稔 (神奈川県博菌類ボランティア)

青木実氏編集による『日本きのこ図版』は、命名規約上の有効出版の条件を満たさない文献ではあるものの、青木実・吉見昭一両氏の執筆による複数の地下生菌の記載が含まれ、これらは国内の地下生菌に関する貴重な記録となっている。「シマショウロ」は1977年に東京都高尾山で採集された標本を基に、翌年『日本きのこ図版』中で青木氏により観察記録がなされた地下生菌である。特徴的な縦方向の畝状突起を持つ担子胞子の形態から、シマショウロは当時、ホウキタケ属菌との強い系統的關係性が知られている *Gautieria* 属の菌として同定された。それに伴い、*Gautieria* Vittad. には「シマショウロ属」の和名がしばしば用いられてきた。

一方、Orihara et al. (2016) は、イグチ科ヤマイグチ属や *Leccinellum* 属に近縁で、かつ地下生菌の属である *Rossbeevera* T. Lebel & Orihara (ツチダマタケ属；新称) と姉妹関係にある地下生菌の新属 *Turmalinea* Orihara & N. Maek. (ベニタマタケ属；新称) を記載した。本属に含まれ、国内のブナ・ミズナラ林に発生する種 *T. mesomorpha* Orihara は、長野県以北で発生が確認されている subsp. *mesomorpha* (アオゾメツチダマモドキ；新称) と、四国から記録のある subsp. *sordida* (ヨゴレツチダマモドキ；新称) の2亜種に分けられる。子実体や担子胞子の形態や発生環境から、Orihara et al. (2016) は本種とシマショウロとの類似性を指摘したが、両種の直接的な比較はなされなかった。演者らは、シマショウロの産地である高尾山において *T. mesomorpha* 子実体を採集し、青木氏の残した資料との比較した結果、両種は同一であると考えられた。DNA 複数領域による比較の結果、高尾山の標本は subsp. *mesomorpha* と *sordida* の中間的な塩基配列を有しており、さらに核 rRNA 遺伝子 ITS 領域では、ITS2 の長大な挿入配列部分に、両亜種には見られない特有の遺伝的変異を生じていた。以上から、「シマショウロ」と呼ばれていた菌は、過去に *T. mesomorpha* の2亜種間の交雑の結果生じた系統であることが示唆された。また、本菌（「シマショウロ」）の和名については、現状では基本亜種であるアオゾメツチダマモドキに包含しておくことを提案する。さらに、「シマショウロ」とは系統的に類縁のないことが明らかになった *Gautieria* については、「シマショウロ属」の呼称を廃止し、「ガウチエリア属」を和名として用いることを提案する。

引用文献

Orihara T, Lebel T, Ge Z-W, Smith ME, Maekawa N. (2016) *Persoonia* 37: 173–198.